

Title	経済地理学に於ける自然環境観察の意義及び手続きに就いて
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.9 (1936. 9) ,p.1311(53)- 1340(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19360901-0053
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360901-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のみが生産販賣數量の制限を受け、従つてそれより生ずる生産費單價昂騰の負擔を蒙る。斯かる混合企業と單純企業との利害對立の結果シンデケートは崩壊する矛盾を藏する。それ故シンデケートの存続には多くの場合銀行乃至國家よりの外部的強制を必要とするのである。

擬てカルテル形態の下級から高級への質的高度化過程は同時にカルテルの自己否定への發展過程でもある。蓋しカルテルは本來加盟企業が相互に資本的に獨立して存することをその特徴とする。勿論シンデケートは加盟企業が資本的に獨立なるが故にそれはカルテルの一種なのである。然し同時にシンデケートにあつては、他のカルテル形態と異り各企業は全くその商業的獨立性を失つてゐるが故に資本的獨立性を失つたにも等しい。而も多くの場合加盟企業は共同出資して新しい共販會社を設立するが故に、多少なりと其處に加盟企業相互の金融的—資本的結合の端緒が與へられてゐる。それ故シンデケートは加盟企業が金融的に結合し、従つて夫々その資本的獨立性を失ふ所のコンツェルン乃至トラストへの過渡形態と看做し得る。

茲にカルテル諸形態の質的高度化過程の研究を終り、次いでコンツェルン、トラストの質的高度化過程の研究に移らなければならぬ。

經濟地理學に於ける自然環境觀察の

意義及び手續きに就いて

小 島 榮 次

一 經濟地理學に於ける自然環境觀察の意義

經濟生活に於いて吾々を圍繞する自然が重要な役割を勤めて居るといふことは、何人も否定し得ぬ事實であらう。極端な場合の例ではあるけれど、海から遠いしかも湖沼河川に恵まれて居ない地方の住民にとつて、水産業が主要な生産活動とはなり得ないし、一年の大部分の間地表が氷に蔽はれて居るやうな寒帯の住民にとつて、農業が主要な生産活動となり得ぬことは今更云ふまでもなからう。又より、極端でない場合をとつても、例へばゴム・コハ・ア・甘蔗の如き熱帶産物は、現在の生産技術を以つてする限り現在の如き品質のものを、熱帶以外の自然的條件の下に於いて營利的に生産することは出来ない。斯くして自然的條件即ち自然環境は、經濟現象の地域的分布を決定する諸要因中、確かに重要な部分をなし、従つてその研究は經濟地理學研究に於いて、當然重要な一部門を占める。殊に

それは一見固定的に地表と結び着いて居り且つは自然科學の進歩の結果として比較的判然と吾々の觀察し得る性質のものである爲めか、嘗て經濟地理學否地理學一般に於いて、特に重要な部門とされて居た程である。筆者はこゝで現在考へるところに従ひ、經濟地理學に於いて自然環境が如何に取扱はるべきかを略述したいと思ふ。

然し乍らそれに先立つて、斯學に於いて自然環境とは如何なるものであるかを、明かにして置かねばならぬ。一言にして云へばそれは一定の地域に於ける經濟現象を圍繞する外界の自然である。そして後者は又、大體に於いて人間にとり所與のもの、人間活動の結果でないもの、人間以前から存在するものと、云ふことが出来る。例へば一地域の平均氣温・降雨量の四季に於ける分布・或は山岳と平野の分布・水陸の分布・土壤の性質・地下の埋藏物等々、すべて人間にとり所與のものである。しかもこれ等と人間の經濟生活とは密接な關聯を保ち、従つてこれ等を以て經濟現象の環境と看做すことは當然である。他方これ等に對して吾々は、一地域の經濟現象を圍繞する環境の中に、人間の社會生活の結果として現れたもの、人間が意識的に無意識的に作り出したものを認めねばならぬ。例へば經濟組織とか生産技術の一定の段階とか、或は都會とか耕地とかの如きであつて、經濟現象を取り圍んで必然的にそれを條件づけるところのものである。これを筆者は文化環境と呼んで置く。自然は人間の經濟生活に於いて勞働對象であり勞働手段ともなる。人間はそれに勞働を加へ勞働手段を用ひて、消費財或は勞働手段を生産する。その場合自然は人間の勞働に依つて變化せしめられ、右に述べたが如き自然環境たる性質を失はねばならぬことがある。例へば陸峽が切り開かれて運河となつたり、乾燥地に灌漑が行はれて水田が現れたりする場合、それは明かに文化環境に變化したのである。

環境に變化したのである。

然し乍ら人はこゝで一つの疑問を起すかも知れない。即ち斯くの如く自然環境と文化環境とを一應は觀念的に區別し得たとしても、果して實際の經濟地理學的研究に際して、現實にかゝる區別を立てることが常に可能であるか否かの疑問である。自然環境は人間活動の結果として文化環境に變更させられる。然し場合に依つて、その變化が判然たる顯著なる變化である場合と然らざる場合とがある。例へば陸地が水路に變化したり、乾燥した原野が水田に變つたり、或は又その反對に沼澤地が干拓されて耕地となつたりする場合は、前者に屬する。然るに、殖林が成功して禿山に樹木が生ひ茂りその結果として河川の氾濫があとを絶つた場合、或は更にそれがその地域の降雨量に若干の變化を與へたとする場合、河川はやはり從來の河川であり大氣はやはり大氣であることに變りがなく、従つてこの場合の河川や大氣に於ける變化は、判然たる顯著なるものではない。しかも猶吾々はこれ等をも文化環境とすべきであらうか。自然を以て人間にとり所與のもの即ち人間以前から存在する儘のものとする前記の解釋に従へば、一見したところ正しく然りと思はれるかも知れない。然らば斯かる分類法は果して現實に可能であらうか。或はさうせねばならぬ何等かの必要があるだらうか。自然は絶えず變化して居る。極端な場合を挙げれば、歴史前の時代に地表の大部分が氷河に依つて蔽はれて居たことは、一般に認めらるゝところである。歴史以後に於いてすら、例へば新疆地方の如き嘗て唐代には相當大なる人口を包容して居た地域が、現在では沙漠と化して居るやうな場合もある。萬物は運動し變化する。山の形・川の道筋・海岸線その他、極めて徐々にはあるが變化して居る。

ない部分はない。而してそれは當然に人間活動に依つても何等かの變化を蒙る。極めて微細な變化まで勘定に入れるならば、人間生活の行はれる空間に於いて、純粹に人間以前の儘である自然なるものは、殆ど存在しないと云つてもよいであらう。斯くして前述の如き分類法が現實に適用し得ないことは明かである。従つて又斯かる分類法が用ひられねばならぬ必要もなく、否むしろさうしてはならないと云ふべきである。蓋し一般に科學的研究に於ける分類は、科學的認識の爲めの方便であり、従つて現實の世界を取扱ふ種類の科學に於いて現實に適用し得ない分類法を用ひようとすることは、全く意味のないことだからである。然らば吾々の當面して居る問題は如何にして解決したらよいか。然し乍らこの疑問が誤まつたものであることは明白である。蓋し右に挙げられたやうな變化は、單に量的の變化に止まり、自然の自然たる本質を變化せしむるものでない。陸地が水路となればそれは質的變化である。單にその場所に於ける土の量が減少し水の量が激増しただけのことではない。他の例を挙げれば、從來人間の踏み込まなかつた草原(自然)が放牧場に利用されることとなつた場合、その土地そのものには最初殆ど何の變化もないかも知れぬが、それは質的に變化して今や文化環境である。同様な例は、野生の動植物が、人間に飼育されて家畜・農作物・その他となる場合にも見られる。これに反して、河川の水量が一年中を通じて從來よりも平均したとしても、それは量的變化に止まる。單なる降雨量の變化も然りである。故に前者の場合は自然環境が文化環境に變化したと云ひ、後者の場合には依然として自然環境であると云はねばならぬのである。現在のところ筆者は、斯かる分類法が恐らく現實の場合の研究に適用可能のものであり、且つ又吾々の研究目的から見ても妥當的なものである。

あると信じて居る。然らば何故さうなのであるか。或は又、自然環境と文化環境とを分類せねばならぬ必要はどこにあるのか。

こゝで吾々は、經濟地理學に於ける自然環境觀察の意義を述べねばならぬ。而してそれが爲めには先づ第一に、自然的條件の社會生活に對する意義を明かにする必要がある。然し乍らこの點に關しては、既に故伊藤教授の勞作があり(三田學會雜誌、第十九卷第七號、大正十四年七月號所載「自然的地理的環境の經濟學的考察——主として社會的經濟的發達の要因又は條件としての自然について及び同所に引用された諸文献參照)こゝに特に詳論することを止め、單に次の事を述べて置くに止める。即ち自然は人間社會と勞働過程に於いて結び着き、後者に對して食料その他社會生活維持の第一義的必要品を與ふること、換言すれば、自然は社會の物質的基礎を形成する最も重要な要素の一つであり、且つ又自然は常に所與のものとして人間の所産即ち文化環境と結合し、更に經濟現象と交互的作用し反作用して、これ等三者が渾然たる複合體を構成すること、及び自然が環境として社會生活に對して與へる影響は、その社會の生産關係の諸事實殊に生産技術に依つて大いに變化すること、を指摘して置くに止める。この二つの命題の中、前者は一般に經濟地理學に於ける自然環境觀察——それが如何なる手續きでなされるかを問はず——の重要なことを明かにし、後者は特に筆者が上述の如く文化環境と區別してひと先づ自然環境のみを取上げ、その研究を經濟地理學の一部門とした所以を説明する主要な理由となるものである。

自然は人間の社會生活に對して重大な影響を與へる。然しその作用は常に受動的である。と云ふ意味は一言にし

て言へば、人間の社會生活があるが故にそこに諸種の自然的條件の影響が現れるといふことである。例へば東北地方の凶作は、そこに一定の型の農業活動が行はれて居ることを前提とし、その農業活動をめぐる複雑極まりない諸種の社會的要因の下に、その地方の自然的條件が現實に起こつたやうな凶作といふ結果を生む一つの要因となる。従つて同一の自然的條件でも、社會の生産關係の異なるに従つて、その人間社會に與ふる影響が相違して來る。まことにこの事實は、社會の觀察或はその發達の諸條件・その諸型態等の觀察を行ふに當り、社會の生産力の分析から始めねばならぬといふ科學的基準が、この場合にも妥當することを意味する。然らば今自然のみを分離して研究することは、當然無意義ではなからうか。然し乍らさうではない。むしろ筆者の見地からすれば、生産關係の變化するに従ひ自然の影響も異なるが故にこそ、一應自然のみを抽象して研究する價值がある。云ふまでもなく一般に科學的研究に於いて、現實には或る一體をなしてその部分々々が決して分離しないところの全體を、全體としてその儘取上げることはない。當然吾々は、それを何等かの局面或は要因に分析して研究を進めねばならぬ。従つてこの場合に於いても、經濟現象を圍繞してその地域的分布を決定する環境——即ち經濟地理學に於ける地理的環境——を全體としてその儘取上げることが不可能であり、何等かの分析が行はねばならぬ。それに對して筆者は、それを自然環境と文化環境とに分つて、ひと先づこれ等兩者の夫々を單獨に研究することを提議するのである。自然が經濟現象の地域的分布を決定する極めて重要な要因である以上、且つ又明確に人間及び人間の所産であるものから區別し得る以上は、先づこの二者が區別されることは當然であらう。(註一) 一應自然のみを分離して觀

察することは、經濟現象の分布と自然環境との關係を探ることに役立つと同時に、自然環境の影響が生産關係の相違に伴つて如何に相違した結果を現すかを知ることに役立つ。勿論吾々は、嘗つて所謂地理的唯物論者がなしたやうに、自然と文化現象との直接の因果關係を求むべきではない。事實上、自然と文化現象との間に何等かの直接の相關々係を見出すことすら困難であらう。然し乍ら二地域の間について、同一の或は類似した自然乃至自然の一方面と結合して如何に異なつた經濟現象が存在するかを觀察することは、或は又その反對に、異なつた自然と結合して如何に同種類の經濟現象が存在するかを觀察することは、結局生産關係の作用或は又こゝに云ふ文化環境の作用を明かにすることに役立つものであり、従つて又、經濟現象の地域的分布を決定する法則の探究に、重大な貢獻をなし得る所以であると云はねばならない。換言すれば、吾々がひと先づ自然環境と文化環境とを分離して研究を進めることは、結局、經濟現象の地域的分布の究極の決定者であり地理的環境の基本部分であるところの生産關係(自然はその重要な契機の一つである)を明かにするが爲めには、最も有效な方法であると看做されるのである。否むしろ、地理的環境及びそれと交互作用をなす經濟現象とからなる全複合體の正確な理解にとつて、是非とも必要な研究過程であると云はねばならぬ。斯くして吾々は、單に斯かるものとしての自然環境を研究するのではなく、文化環境の研究と併せて、結局に於いて地理的環境を明かにするが爲めに、自然環境をひと先づ地理的環境の全體から抽象するのである。

註一 この點に關して問題となり得るのは、環境としての人口である。それは自然環境であらうか、文化環境であらうか。

マルクス始めその派の人々は、自然と人間との對立を特殊の意味に解する。即ち一つの動物種としての人間は當然に自然の一部であるが、たゞ人間が他の生物と異なつて能動的に周圍の自然に順應し得る點に於いて、自然とそれを對立せしめることが出来る。蜘蛛や蜜蜂などもその巢を營む巧妙精緻な作業から一見能動的に自然に順應するものの如くであるが、それは結局本能的な活動に過ぎず、これに對して人間は、本能以外に豫め意識して居る目的に従つて行動する點に於いて、周圍の自然と異なつて居る。而してマルクスは、この意味で自然と對立する人間が、自然から與へられたものばかりでなく、社會生活の結果獲得したものを持つことを指摘する。即ち人間は、社會生活の結果自身をも變化せしめるが故に、結局に於いて、自然から與へられた側面と自己の社會生活の所産である側面とを有すると云ふ。(高島譯「資本論」改造社版、第一卷第一冊、一四九—一五〇頁參照)そこでウィットフォードは、「労働過程の單純なる諸契機を分析するに當り、労働力の自然的側面と社會的側面とを認めて、人間の生理的特質・種族・國民性等を前者として擧げ、技巧・知識等を後者として擧げて居る。(川西正鑑譯「地理學批判」有恒社、昭和八年、一四五—一五八頁及び一七四—一七五頁參照)こゝに具體的に擧げられたところに就いては、或は異論があるかも知れないが、自然的側面と社會的側面とを持つと考へることは確かに正しい。然し乍らこれ等兩者は互ひに相融合し、この融合の後では最早全く區別され得なくなる。(前掲「地理學批判」一五五—一五六頁參照)然らば吾々の研究の場合に於いては、人間のこの二つの側面を夫々自然環境及び文化環境として取扱ふことが出来ない。區別しようとしても不可能だからである。従つて吾々は、環境としての人口を自然環境か文化環境かのいづれかに仕分けねばならぬ。然るに人間は一動物種としては、明かに自然環境の中に包含さるべきであり、社會生活に依つて變化せしめられた部分が如何に大きくとも、人間は依然として人間なのであるから、前述した筆者の分類法に従へば、自然の一部と看做されねばならぬこととなる。然しそれは吾々の場合に於いては明かに誤りである。吾々が自然環境と文化環境とを區別する場合、前者を以つて人間以前のもの或は人間の社會生活にとつて所與のもの、或は又簡單に云へ

ば、人間を圍繞する自然とし、後者を以つて人間の社會生活上に於ける諸行動の所産としたのであつて、當然そこに自然と對立するものとしての人間が考へられて居るのである。人間が自然環境か文化環境かそのいづれか一方に所屬せられねばならぬとすれば、斯かる前提上當然後者に屬することとなる。従つてこの場合、前述した筆者の分類法を無視することになるけれども、これは決して誤りではない。蓋し一つの觀方に依つては、人間もその社會生活もすべてそれを圍繞する外界の自然と共に「自然である」と云ひ得るし、他の觀方からすれば人間は自然から區別されるものと云へる。即ち自然から區別されるものとしての人間を考へることも、自然の一部としてのそれを考へることも、ひとしく可能なのであつて、吾々の場合に於いては既に前提として人間を自然から區別して考へて居るのであるから、斯かる前提に基いて當然文化環境に屬するのであり、前述の分類法に従つてそのいづれかに決定さるべき性質のものではない。

從來斯くの如き立場から地理的環境が自然環境と文化環境とに分けられた場合を筆者は知らない。一定の自然的條件が經濟現象へ與ふる影響は生産關係の異なるに従つて異なることを認めた人々でも、例へばウィットフォードの如き、彼が地理學を以つて社會現象に於ける自然的契機の意義を探究するものとする見解をとる爲めか、(註二)斯かる取扱ひをして居ない。彼は自然と人間とは先づ労働過程に於いて結合するといふマルクスの見解に従ひ、労働過程の諸要素即ち労働力・労働手段・及び労働對象の夫々に就いて自然的契機を探究し、それが社會的生産力發展の各段階に於いて如何なる意義を持つかを明かにしようとする。彼の目的からすれば、自然的條件を斯くの如く取扱ふことは恐らく當を得て居るであらう。然し乍ら地理學の本質に就いて彼と異なる見解を持つ筆者にとつては、自然的條件の斯かる取扱をなし得ぬことも亦當然と云はねばならぬ。

他の人々に就いて見ても、例へば兩者共に吾々に學ぶべき多くのものを與ふる權威者であるところのディートリッヒ及び本邦の川西教授は、明かに自然環境及び文化環境といふ名辭を用ひられながら、それ等を經濟現象の環境として、人間、人間の環境として用ひられて居る。然し乍ら筆者の見地よりすれば、經濟地理學は經濟現象の地域的分布を研究するものであつて、從つて吾々は人間とその環境をではなく經濟現象とその環境を考察せねばならぬと考へられる。(三田學會雜誌、第三十卷第一號、昭和十一年一月號所載拙稿「地理學の本質と地理的環境に就いて——經濟地理學方法論に於ける一斷想——」第五及び六節參照)(註三)

註二 彼は地理學を以つて斯くの如きものとする見解を、何處にも特に明示して居ないやうである。然し右の態度はその「地理學批判」全卷を通じて觀取される。

註三 地理的環境を自然環境と文化環境とに分つ研究の仕方は、實踐上にも大なる意義を持ち得ることを、序で乍ら指摘して置く。即ち相異なる經濟組織のいづれに於いて、自然的條件の一層效果的なる利用が行はれ得るか、を知らんと欲する人々にとり、この研究の仕方から恐らく大なる示唆を含むが如き結果が得られるであらう。他の條件を全く同一とする限り、自然的條件のより、效果的な利用は、社會の富の總額をそれだけ増大せしめるのだから、諸種の立場に立つ多くの人々から當然大なる關心を拂はれる筈である。

さて、自然は經濟現象に對する環境として作用すると共に、他方經濟現象は自然に反作用してそれに變化を與へる。この間の交互作用は否定し得ぬ事實である。而してこの交互作用の態様はその社會の生産關係の諸事實に依つて決定される。故に自然を觀察する時、吾々は一定社會に於ける自然環境が如何にあるかを觀察するだけでなく(勿

論この場合、自然がその内的作用に依つて如何に變化しつゝあるかを觀察することも忘れることは出来ない)それが外的作用に依つて如何に變化せしめられて居るをも觀察せねばならない。斯くして吾々がひと先づ自然のみを分離して研究し、一定の社會に於ける自然環境が如何なる状態にあるかを明かにし得たならば、當然第二段にはその經濟現象との交互作用を明かにせねばならない。結局自然環境の觀察は、斯かる綜合的な研究の前提として行はれるのである。勿論他方に於いて文化環境の觀察が行はれ、生産關係の諸事實が明かにされて居らねばならぬことは云ふまでもない。自然環境が經濟現象と交互的な關係を持つのは、嚴密に云へば、それと文化環境とが地理的環境に合成されて、その上で經濟現象と交互的な關係に立つのである。自然環境を文化環境から區別して研究することは、文化環境に對する同様な研究と共に、結局に於いて、筆者の考ふるが如き經濟地理學に於ける研究の出發點をなすものと云ふべきである。

二 自然環境の構成

自然環境觀察の經濟地理學に於ける意義を上述の如く理解するとして、さて次に觀察の手續の考究に移るのであるが、こゝで先づ第一に吾々の當面する課題は、自然環境そのものの分析である。即ち一地域自然環境の適確な觀察を可能ならしめる爲め、先づそれをその構成要素に分析せねばならぬ。云ふまでもなく一地域の自然は、氣溫・地形・土壤・水流・その他多くの要素の結合體である。從つて又それが經濟現象に作用する時或は經濟現象から作用を受ける時、常に結合體として作用し或は作用を受ける。氣溫のみが或は地形のみが、單獨に經濟現象へ作用すること

ともなければ、單獨に作用を受けることもない。自然が諸種の要素の結合體である以上、このことは改めて云ふまでもない明白なことである。氣溫のみが作用して居ると思はれる場合があつても、それは單に全體としての作用の中で、氣溫の勤めた役割が特に著しく大きかつたことを意味するに過ぎない。氣溫が斯かる役割を勤めた背後にはそれに對して影響を與へ或はその反對に影響を受ける要素が控えて居るのである。斯くして吾々は先づ、自然環境の觀察は常に一地域の自然を一つの綜合體全體と看做して取上げねばならぬといふ研究手續上の一基準を與へられるのである。従つて又自然環境の第一歩は、綜合體たる自然をその構成要素にひと先づ分析することを以つて踏み出される。

まことに世界中に孤立して存在するものは唯の一つもなく、自然といふ全體を構成する諸要素も、相互に極めて密接な關係に立つて居り、一つの要素の變化は他の要素に影響を與へずには置かない。例へば一地域の氣溫・土壤の性質・等からその地域に繁茂する野生植物の種類が決定され、その逆に植物の種類は土壤の性質に影響する。その他著しい場合の例は、風蝕及び水蝕作用の地形及び土壤に對する影響・海流や風等の氣溫及び大氣の濕度に對する影響等に見られる。すべてこれ等自然の諸要素の關係は相互的であつて、或る場合には直接的な或る場合には間接的な、そして又或る場合には顯著な或る場合には微細な影響を、互ひに與へて居るのである。斯くして自然は、縱令人間が登場しないでも、その部分々々が全體として一つの緊密な綜合體を構成して居り、その内的作用に基いて諸種の變化を生み出して行く。換言すれば、氣溫・地形・土壤・その他に關する無限に多種多様な自然現象は、決して個

々に單獨に發生するのではなく、相互間に一定の秩序を持つて居り、この秩序に従つて互ひに他の現象に對する一定の原因を與へて、それ等の現象を必然的に發生せしめて居るのである。まことに「地球上の諸種自然界は單に空間的に結合せられて居るだけでなく、發生的に同一の地球から分化作用に依つて現れて來たものであり、因果的にも結合せられて居る。故に地球を一つの太なる機構或は有機體と看做することが出来る。」(Alfred Hettner, Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden. Breslau, 1927. S. 118) 斯くして、地理的環境としての自然の意義を正しく把握するが爲めには、斯かる自然界の秩序を明かにすることが必要になる。従つて吾々の分析の仕方は、先づこの目的にそふものでなければならぬ。

次に吾々が注意せねばならぬのは、環境としての自然に對する觀察の限界である。前述の如き諸種の自然現象及びそれ等相互間に於ける作用は、主として太陽の光線及び熱と萬有引力とに依つて動力を與へられ、地球自體の物理化學的構造に依つて條件づけられて、その結果として發生する。例へば太陽の光線及びその熱が持つ一定の物理化學的性質は、動植物に作用してその發育を可能ならしめ、氣溫を生ぜしめ風を起し降雨を生ぜしめる。萬有引力の作用は地球の自轉公轉を起し、延いては四季の變化・潮汐作用・海流・或は地形の變化等を齎す動力となる。更に又、地球の形狀・大いさ・天體に對する位置・地殻及び地球内部の物的構造・等は、四季の變化・土壤の基本的構成・地震・噴火・等を生む條件となる。(註四) 然し乍らこれ等の動力乃至條件となるもののうち、萬有引力・地球の形狀・大いさ・天體に對する位置・及び地球内部の構造は、地球上の如何なる地域に對しても劃一的のものである。換

言すれば、特定の地域に於けるそれ等動力乃至條件の配置が、特にその地域の實情に即して觀察せぬ限り不明であるやうなものではない。斯くして吾々が觀察の對象とする環境としての自然は、地球上の全地域に對して劃一的ならざるものといふ點に、限界が設けられねばならぬこととなる。従つて特定の地域の自然環境を觀察するが爲めに先づ自然環境の分析を行ふ場合、萬有引力及び地球内部の構造の如きものを、その構成要素の一部門として看做すことは誤りである。勿論斯かる基本的動力乃至條件が常に正確に理解されて居らねばならぬことは云ふまでもないが、特定の地域の自然環境を觀察しようとする吾々としては、例へば、萬有引力・太陽熱・その他の結果たる氣候の如何を知ればよいのであつて、萬有引力そのものを調べる必要はない。

註四 自然環境の諸現象に對する萬有引力の意義は、比較的最近に唱道された所謂「大陸漂移説」に依つて一層増大するかに見える。即ち Alfred Wegener (1880-1931) に依つてその著書 *Die Entstehung der Kontinent und Ozeane* 1915. 中に唱へられたこの説に従へば、天體の引力及び地球の自轉の結果として、大陸が移動し、この各大陸の移動は地球上に於ける位置を變化せしむるのみならず、移動に對する抵抗の大なる所には山脈を隆起せしめる。従つて、各地域の氣候、地形、動植物等に影響を與へずには置かぬこととなる。

自然環境の分析に關して注意せねばならぬことが、未だ一つ殘されて居る。即ち、吾々の取扱ふ自然は、それ自體が多種多様の要素から構成される綜合體であるが、しかもこの自然環境全體は文化環境と合して地理的環境といふ綜合體を作る。而してそれは常に文化環境と相伴つて經濟現象に作用し、或は後者から作用されるものである。従つてその分析は、それに基づいて行はれた觀察が文化環境に對する同様の觀察と綜合されることを豫定してなされ

ねばならぬこと當然である。吾々は地理的環境を自然と文化の兩者に分析し、更にこの兩者を夫々その構成要素に分析する。従つて後にはこの兩者夫々の内部に於いて綜合が行はれ、更に兩者が地理的環境として綜合されねばならない。斯くして、吾々が地理的環境からひと先づ自然環境のみを抽象するとしても、常にこの事實を忘れることは出來ず、それを分析するに當つても當然斯かる要求を満足せしめるやうな形に於いてなさねばならぬ。

さて吾々が環境としての自然を見る時、それが結局次のやうな四種類の基本的な要素から成つて居ることが認められる。即ち大氣と陸土と水と生物である。而して又これ等のものそれ自體が夫々更に多くの要素から構成されて居る。結局自然環境に於ける一切の現象は、さきに述べたやうな基本的動力乃至は條件の下に、これ等四方面の要素が何等かの態様で相結合することに依つて生じるのである。そこで從來の地理學者も、環境としての自然界を觀察しようとする場合、殆どすべてこの事實に基づいて自然を分析して居るやうである。勿論人に依つて斯かる分析の仕方を整然たる形で示して居る人々もあり、さうでない人々もある。殊に英米の地理學者は、すべて後者に屬するやうである。然し乍らそのいづれなるを問はず、すべて根本的には右の如き認識に基づいて分析を行つて居ると云ひ得るであらう。今比較的に整然たる形でこの分析の仕方を示して居ると思はれるヘットナー・フリードリッヒ。等の場合を參考にして分析して見ると、次の如くなる。(註五) 即ち先づ第一段として、自然環境は次の四つの領域に分けられる。氣界・陸界・水界・動植物界・がこれである。(註六) 氣界又は大氣圈は地球を取圍む大氣の領域を指し、大氣の含有物・氣温・風・濕度・降雨・等の自然環境構成要素が、この領域に含まれる。陸界又は陸圈は陸土の領

域であり、地殻の含有物(地表に於いては土壤・湖水・河水・地下に於いては埋藏礦物・地下水・岩盤の如きに合成されて居る諸物質)・地形・等の要素を含む。水界又は水圏は云ふまでもなく水の領域であるが、後述するが如き理由で海洋に限られ、その成分・水溫・海流・波浪・潮汐・等の諸要素がこれに屬する。最後に動植物界又は動植物圏は、野生の動植物の種類及びその生活態様等の諸要素を含む。

註五 Alfred Hettner, Vergleichende Länderkunde. 4 Bde. Leipzig und Berlin, 1933-35. Ernst Friedrich, Allgemeine und spezielle Wirtschaftsgeographie. 1. Bd. 3. Auflage. Berlin und Leipzig, 1926. Ernst Friedrich's Geographie des Welthandels und Verkehrs. Neubearbeitet in Zweiter Auflage von Walther Schmidt. Jena, 1930. 参照。

註六 氣界は Lufthülle 或は Atmosphäre 水界は Wassershülle 或は Hydrosphäre 動植物界は Pflanzen- und Tierwelt と呼ばれるが、陸界に對する綜括的名稱としては Lithosphäre といふのが用ひられて居るだけのやうである。勿論、岩石圏とは云ふものの、その内容とするところは、氣界及び水界に對する、換言すれば氣體及び液體の領域に對する固體としての地殻の領域を意味するのである。即ちその上面は陸地として大氣に接するか或は海底・湖底・等として水に接するかのであつて吾々にとつて判然として居るが、その下界は地球内部の岩漿に接するもので不明である。然し乍ら筆者がこゝで陸界と呼ぶのは、これと異なつて居る。

右に挙げた四つの領域は、夫々多種多様の現象を包容して居る。従つて第二段の分析として、吾々はこれ等四つの領域内に在つて自然環境の構成要素となつて居るものを明かにせねばならぬ。第一段の分析に於いては、吾々は謂はゞ直觀に基いて分析を行ひ得たのであつたが、第二段の分析の對象は、吾々の直觀の及ばない彼方に在る極め

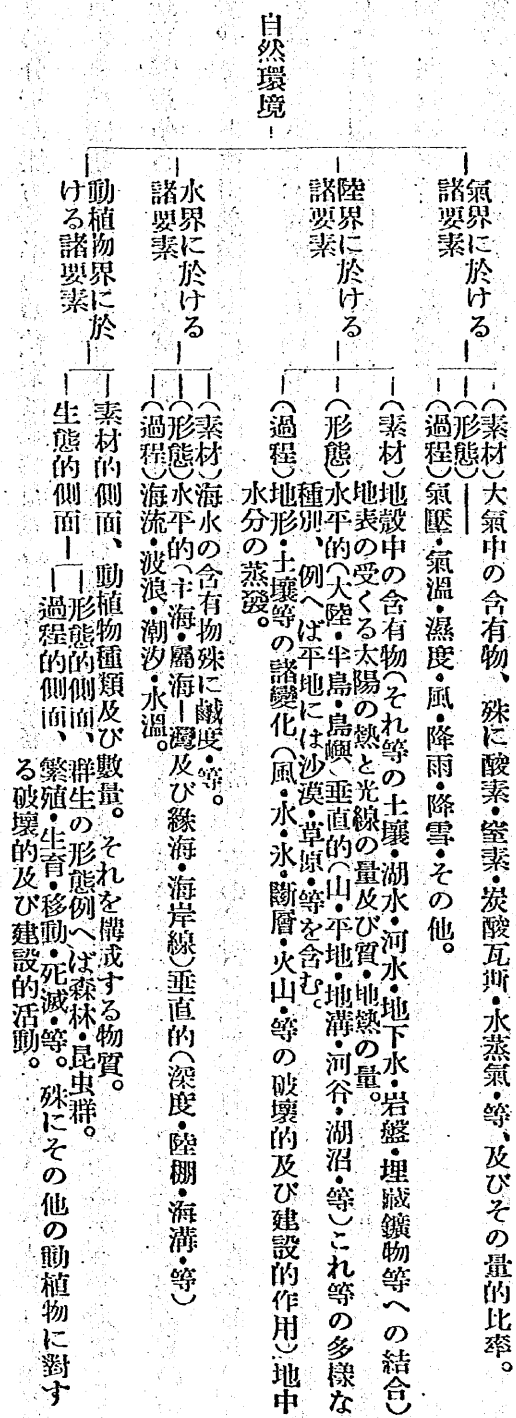
て多種多様の現象の集合體である。従つてこの場合には、分析を行ふ爲めの何等かの準則を必要とせざるを得ない。仕合せにも吾々は斯かる準則を、ヘットナーの次の言葉の中に見出すことが出来る。即ち「無機的自然界は三つの範疇の下に把握され得る。即ちその形態・素材的構成・及びそれに生ずる諸過程である。然し右の三領域に於けるこの三つの範疇の意義は、その聚合狀態の相違に應じて相違する。形態は地殻表面の場合に於いて最も重要であるが、水界及び氣界の場合に於いては、欠除して居るか或は少くともそこでは獨立的な事實では全くない。素材的構成も亦地殻表面の場合に於いてのみ大なる意義を持ち、それに對して水界及び氣界に在つては、運動過程及び固有の物理的諸關係が、地殻表面の場合よりも遙かに重要である。」(Alfred Hettner, Die Geographie, ihre Geschichte, etc. a. a. O. S. 239) まことに無機物の關する限り、自然界の諸事實は、形ちの面に於いて自然環境の構成要素となつて居るもの(例へば地形)・素材の面に於いて然るもの(例へば土壤)・及び運動乃至は物理的諸關係の面に於いて然るもの(例へば風・海流・氣溫・氣壓・水溫・水壓)の三種類がある。故に右の如き準則に従つて自然環境をその構成要素へ分析することは、結局自然界の内部的諸關聯の秩序を正しく把握する上に於いて、最も有效な方法であり、この點に關する限り、正にこれ以上に妥當な分析方法があらうと思はれない。ヘットナー自身の「比較地理學」も、この準則に據る分析に基いて敘述されて居る。

さて動植物界の分析は如何。野生の動植物の或るものは、吾々人間の衣食住物資の源泉であり、或るものはその反對に吾々の生活の障礙となる。動植物は又、それが如何なるものから營養を攝取し、如何なる場所に棲息し或は

植生するかは、四圍の自然の構成に對して大なる影響を與へ得る。更に又それ等は、その死後に於いても或は腐植土となり泥炭となり珊瑚礁となる。斯くして無機物的領域である氣界・陸界・水界の諸要素と相關聯して、自然の内部的變化の循環に於ける一つの環としての役割を果して居るのであつて、この意味から、動植物界に對する分析の方法も暗示されることとなる。即ち吾々は一地域の野生の動植物が如何なる種類のものであり、如何なる條件の下に如何なる生活を行ふかを觀察すればよいのである。従つて吾々としては、動植物界を素材的側面とその生活の側面とに分析する。而して前記の無機的自然界の分析に對する準則が、こゝでも役に立つのであつて、形態の面に於いて自然環境構成の要素となる場合例へば森林の如きものと、過程の面に於いて然る場合例へば繁殖・生育・移動・死滅・等とに分つことに想到せしめるのである。

次に掲げたのは即ち右の如くにして到達した自然環境分析の概括であるが、この分析に於ける水の取扱ひ方に就いて、猶若干の説明を附して置く必要がある。云ふまでもなく水は大氣及び地表と接觸して一方には大氣中へ他方には地中へ蒸發し浸透し、最後に再び水のすがたに歸るといふ循環過程を繰返して居り、且つ又水と地表とは兩者とも夫々その接觸面の形成に作用する力を持つて居る。その爲めに水の取扱は多少不安定な基礎の上になされざるを得ない。勿論自然科學的に考へれば何等の曖昧さもなく、海水も地下水も雨も、水は飽くまでも水である。然し乍ら吾々は、自然環境構成の要素としての水を考へるのであつて、種々の形態に於ける水は、それと特に關聯の深い他の要素に結びつけられねばならない。或る場合にはその逆に、他の要素を水に結びつけることも、同じ理由で

必要となる。斯くして雨は氣界に、湖水・河水・地下水は陸界に、屬することとなる。これに反して、海底或は海邊の地形は、水界に所屬せしめられる。蓋しそれ等の地形の如何に従つてより、大なる影響を蒙るものは、海水の側だからである。斯くして諸種の形態に於ける水の所屬領域をひと先づ決定し得たのであるが、この決定の基礎は明かに不安定である。勿論、その不安定の程度は、次に掲げる分析に含まれた程度で必然的に常に存在するものではない。吾々の自然科學的な知識が豊富となるに従つて、それは次第に減じて行くであらう。然し乍らそれにも拘らず、この不安定は斯かる分析の仕方にも本質的なものであつて、全くこれを免れることは出來ない。しかも吾々は地理學的見地をとる以上、斯かる分析方法に據ることもやむを得ないのである。



勿論この分析の仕方一つ試案に過ぎぬものであつて、筆者ももとよりこれを完全なものと看做すわけではない。否寧ろそれは前に述べたやうな重大な欠陥を持つて居る。即ち水の取扱に關して分析の基礎が不安定なことである。然し乍ら今この點を姑く措くとすれば、この分析の仕方は、現在のところ大體に於いて承認し得るものの如くである。まことに自然環境に於いて、空氣・陸地・水及び動植物は、その本質を判然と異にする存在であり、全球表面を構成する基本的要素として相互に關聯し合つて居ることも明かであるから、先づこの四つの基本的要素を中心として自然環境を四つの領域に分け、その上で更に前掲の如く細分析するといふ手續きに誤りは無い。否却つて次の如き二三の長所をすら指摘することが出来る。

先づ第一にこの分析の方法は、それに基づいて行つた觀察の結果を綜合することを容易ならしめる。云ふまでもなく分析及び觀察は、綜合の爲めの準備として行はれる。従つて綜合を困難ならしむるが如き分析は、殆ど意味をなさないと言つてよい。その反對にそれを容易ならしむるが如き分析は、少くともその點に關する限り長所を持つと云ひ得るのである。然らば右の分析の仕方は、それに基づいて行つた觀察の結果が綜合されることを、何故容易ならしめるのであらうか。綜合とは抑々如何なる種類の綜合を云ふのか。今その詳細の説明を省き結論だけを簡単に述べて置くと次の如くなる。即ちこゝに云ふ綜合は、自然環境を分析して觀察した結果を何等かの形ちに纏めることを意味し、その次に行はるべき綜合即ち文化環境の觀察の結果との綜合に對する準備階梯の性質を持つものである。従つてこの第一次の綜合の行はれる形ちは、第二次の綜合の行はれる形ちの如何に従つて決定されて来る。然らば

この第二次の綜合即ち自然環境觀察の結果と文化環境のそれとの綜合は、如何なる形態で行はれるのであらうか。云ふまでもなく經濟現象と自然環境との交渉は、經濟過程の中に見出される。人間が積極的に自然に働きかけるのは生産過程に於いてであつて、その場合には自然界に於いて勞働對象・勞働手段が求められる。換言すれば、生産過程に對しては、自然環境がその勞働對象・勞働手段の一部として作用するのである。勞働對象・勞働手段の他の一部及び勞働力は文化環境から提供される。要するに自然環境と文化環境とは、先づ勞働力・勞働對象及び勞働手段として結合し、經濟現象に對する地理的環境を構成するのである。然し自然環境と生産過程との交渉はこれだけでは無い。自然環境を構成する諸要素の中には、勞働對象としてゝもなく、勞働手段としてゝもなしに、生産過程に作用するものがある。例へば、起伏の多い地形或は然らざる地形が、農業・工業・鑛業に對して或る場合に持つ關係の如きこれであつて、生産を助成し或は障礙となる條件たるものである。他方、純粹の流通過程に於いては、自然環境は單に助成的或は障礙的條件として作用するに過ぎない。斯くして經濟過程に於ける自然環境の役割は、結局勞働對象・勞働手段及び助成的又は障礙的條件の一部を構成することであり、換言すれば、斯くの如きものとして文化環境と結合し、經濟現象に對する地理的環境を構成するのである。即ち自然環境は、勞働對象・勞働手段及び助成的又は障礙的條件として、文化環境と綜合され、そこに地理的環境が構成されるのである。これは自然環境からの貢獻或は障礙の如何を觀察する場合でも、或は又逆に經濟現象が自然へ與へる破壞的或は建設的效果を觀察する場合にしても、いづれの場合をも通じて同じである。畢竟するところ、自然環境は文化的條件と右の如き形ちに於い

て綜合され、地理的環境の基本部分であるところの生産諸關係を明かにすると共に、その限りに於いて經濟現象に對する自然環境の意義をも闡明せねばならぬのである。

第二次の綜合が右の如き形態で行はれるものとすれば、第一次の綜合即ち自然環境觀察の結果を自然環境それ自体として綜合する場合も、自然環境をひと先づ個々の構成要素に分析して觀察した結果を勞働對象・勞働手段・及び助成的又は障礙的條件として、更めて纏めることとでなければならぬ。但しこの場合に當つて、前掲の分析に従つて行はれた觀察を斯の如く綜合することは、一見容易でないやうに見えるかも知れない。何となればこの分析方法は自然環境内部の諸關聯を明かにすることのみを目標として組み立てられて居り、四つの領域に於ける諸要素は、すべて斯かる目標に従つて素材的要素・形態的要素・及び過程的要素に分析されて居るに過ぎず、勞働對象・勞働手段・等を構成すべき諸要素は、その間に雜然と混入して居るからである。例へば氣界の素材的要素を見ても、動植物の育成に際しての空氣は勞働手段であり（吾々は一つには空氣を作物或はその根に與へんが爲めに土を耕す）空氣中から窒素を抽出せんとする場合には當然勞働對象であり、而して食料品工業或は何等かの化學工業に於いては、空氣が障礙となる場合が恐らく存するであらう。形態的要素と過程的要素の場合には、それ等が夫々物質の形態及び過程を抽象したものであるから、前者には物質もエネルギーもなく、後者には物質はないがエネルギーのみがある。従つて前者の場合には、助成的又は障礙的條件のみが見出され、後者には勞働手段及び條件が含まれて居る。斯くの如く、この分析に基く觀察に於いては、勞働對象・勞働手段・及び條件が、非常に多數の各種要素の間に混入して

居ることは、一見右の如き綜合を困難ならしめると思はせるかも知れない。然し乍ら翻つて考へて見ると、吾々は特定地域に於ける經濟現象の環境としての自然を觀察するのであつて、その經濟現象が生産過程である場合にはその生産技術に就いて・流通過程である場合には流通上の技術に就いて・豫め多少の知識を有するものと當然想像される。すでにこれ等の知識を有する以上は、右の分析に基く觀察の結果を勞働對象・勞働手段・及び條件として綜合することは困難ではない。それに反し自然環境を最初から勞働對象・勞働手段・及び條件として分析することは、一見合理的なるが如くであるが、吾々の場合それは不可であり、ひと先づ前記の如く分析してその上で右の如く綜合することが必要なのである。その理由は後述するところに依つて自ら明かになるであらう。

次にこの分析方法の長所と看做し得る點は、生産技術に關する吾々の知識から通常勞働對象・勞働手段・等として看做されて居る自然界の諸事實が、眞實には如何なる自然的物質及び自然力から形成されて居るかを知らることが出來、従つて、これ等の諸事實に對する關係がより直接的でない爲めに通常吾々の視野の外にあるが如き要素にして眞實には重要な關係を持つものがある場合、時によつてはこの方法の結果として、或はそれを發見し得るかも知れないといふことである。更に第三には、一地域の經濟現象を全般的に對象として研究する場合、その地域で特に欠除して居る經濟現象を注意することも必要であるが、その際に當つて、この欠除が自然環境に於ける何等かの事情に起因して居るか否かを知らるが爲めには、右の如き分析方法に依らねばならぬ。曩に自然環境を最初から勞働對象・勞働手段・及び條件として分析することを不可としたのは、一つには斯かる理由に基くのである。例へば氣溫及

び雨量を同じくする二地域の間において、一方に見らるゝ經濟現象が他方に欠除して居るとすれば、吾々はこの相違の原因を究明する必要がある。その場合に前記の如き分析方法を用ひて氣温及び雨量以外の自然條件を比較するのであるが、それに依つて或は全體としての自然環境に差異があつてもそれは經濟現象に於ける差異を齎らす程の性質のものでないことを發見するかも知れず、或は自然環境に重大なる差異のあることを見出すかも知れない。要するにこの方法に依つて少くとも消極的に右の原因の所在し得る範圍を限定し得るのである。然るに自然環境を最初から労働對象・労働手段・等に分析するならば、斯かる考察が極めて困難となるであらう。(註七及八)

註七 ウィットフオーゲルはその著「支那の經濟と社會」(平野義太郎監譯、中央公論社、昭和九年刊)の第一編第一章に於いて「支那の經濟過程における、自然によつて條件づけられた生産諸力」を、労働力に對する「人類學的諸基礎」及び「外的な自然的諸條件」に分ち、更に後者を「土地・温度・水・支那工業の自然的諸基礎」に分けて居る。これは彼がその論文「地理政治學・地理的唯物論及びマルキシズム」(邦譯「地理學批判」)に於いて示した方法即ち社會的生產の自然的契機を労働力・労働手段・労働對象・の夫々の自然的側面に分析する方法に據るものであつて、「人類學的諸基礎」は労働力の自然的側面を、「土地・温度・水」は農業に於ける労働手段のそれを、「工業的諸基礎」は工業の労働對象のそれを、夫々意味して居る。然し彼のこの分析の仕方は、吾々の場合には用ひ得ない。その根本的理由は、彼が支那といふ「アジア的一大農業社會に對する科學的分析」(同書副題)を企圖したのに對して、吾々は常に經濟現象の分布を研究する立場に立つといふ點に存する。

註八 前掲の自然環境の分析を以つて自然環境の歴史的性質を表さぬものとする非難が、或は加へられるかも知れない。本來自然環境なる概念は單なる自然と異なり一定の生産技術に照應するものであつてそれを離れては考へられないにも拘ら

ずこの分析がそれに無關心に行はれて居るやうに見えるから、この非難も一應は尤もの如くに思はれるかも知れない。然し乍らそれは自然環境の分析方法即ち觀察の規則と實際の觀察とを區別しない爲めの誤まつた非難である。即ち分析方法が假に自然環境を自然科學的にのみ取扱つて居るやうに見えても、それに基いて行はれる觀察もやはり必然的に斯かるものでなければならぬといふ理由はない。

蓋し、經濟現象を取圍む自然界を、その全範圍にわたつて觀察することは、技術的に全く不可能である。且つ又吾々は自然界を自然的な労働對象・労働手段・等の性質を持つものとして觀察するのであり、従つて又生産技術に關する知識に基いて自らその觀察の限界が劃されることになる以上、吾々の觀察は自然環境の歴史的性質を當然表さずには居ないのである。(第三節參照)

これに加ふるに、前述の如くこの分析方法に據らねばならぬ有力な理由がある限り、これは確かに吾々としては認めねばならぬ分析方法と云ふべきであらう。

三、自然環境觀察とその結果の綜合

自然環境の觀察は前掲の分析に基いて行はれるが、その際吾々の觀察は次の如き範圍内に限定される。即ち先づ第一に、吾々の行ふ自然環境の觀察は、自然界の諸事實全部に及ぼうとするものではない。又假にさうしようと企てても、技術上それは明かに不可能である。然るに自然界の諸事實はすべて直接或は間接に關聯し合つて居る。即ち特定の經濟現象の自然環境は、畢竟自然界全部であると云へぬこともない。又假にそれ程に廣大なものと見ずに、比較的に近接した關係にある諸事實のみを以つて自然環境と看做すにしても、その場合にすら吾々の觀察はその全部に及び得るものでは恐らくないであらう。斯くして吾々の觀察は自然環境の一部にしか及ばないと云ひ得ること

になる。然らばその及び得る範圍は何によつて定まるか。

抑ふ吾々が經濟地理學的な觀察を實際に行ふ場合、常に特定の經濟現象の環境としての自然を觀察するのである。従つてその特定の經濟現象に關する生産技術に就いて多少の知識を豫め持つものと想像することが出来る。吾々はこの知識に基いて觀察の焦點を定め、その焦點を中心としてそれにより密接な關係を持つ自然界の事實のみを選び出して(この分析の仕方が自然現象相互間の關聯を示す性質のものである爲めに、この選擇を行ふことが可能となる)觀察すればよい。結局吾々の觀察の範圍は、先づ生産技術に對する吾々の知識の如何で定まるのである。但しこの場合の生産技術は、當面の觀察の對象である特定地域の經濟現象に於けるそれを意味するばかりでなく、他の地域の同様な經濟現象に於ける生産技術をも意味せねばならない。蓋し自然環境觀察の直接的な目的の一つは、例へば自然的條件のみを見れば特定地域に一定の經濟現象に對する可能性あるに拘らず現實には斯かる經濟現象が欠除して居るのは如何なる原因に基くか、を探ねてそれに依つて生産諸關係を明かにし、延いては經濟現象の地域的分布の原因を求めることの一助とするにある。云ふまでもなく特定地域の生産技術の觀點に立つて見ても、その地域の自然的可能性がわづかに瑣細の一部分しか實現されて居ない場合も多い。南米の如きは、その最も著しい例として挙げられるであらう。然し乍ら東洋或はアフリカの未開の地方に於いては、その地域に行はるる生産技術から見るとならば自然的可能性それ自體がすでに僅少である。これ等の場合、その地域自體の生産技術から見て多大の自然的可能性が實現されずに居るのは何故かを究明することは勿論重要であるが、同時に、他の地域の生産技術から見れば猶多大の可能性を實現し得る筈であるに拘らずそれが實現されてないのは何故かを考究することも吾々の目的から云つて同じく重要である。斯くして自然環境觀察の範圍を限定する基礎としての生産技術は、その特定地域のそれのみでなく他地域のものも含む。

斯くの如くして觀察された結果を、前述の如く労働對象・労働手段及び助成的及び障礙的條件として綜合するとに依り、經濟地理學の固有の領域に於ける自然界の分析・觀察及び綜合の過程を終る。然し乍ら筆者の見解に従へば、斯學固有の領域を離れて地理學一般の見地に立つ時、吾々は更に意味を異にする自然界の分析・觀察及び綜合の過程を見るであらう。即ち自然界を文化現象一般の環境として分析し觀察し綜合する過程である。從來の氣候帶或は動植物帶の研究は、斯かる性質を持たしむべきものと考へられる。要するに筆者は地理學一般に於ける研究に對して共通なる基本的作業手段を提供しようとする性質を持つところの自然界の分析・觀察・及び綜合の過程が存すると思ふのである。(註九)

註九 勿論自然界に對してのみ斯かる研究過程を考へることは出來ず、他方に文化現象に對しても、同性質の研究が行はるべきである。而してそれは具體的には、經濟現象の何等かの基本的側面に就いて行はるべきだと思つて居る。

若しも經濟地理學的研究に於ける自然界の分析・觀察・及び綜合が全く正確なものであつたならば、吾々は氣候帶或は動植物帶の研究の如きを必要としないかも知れぬ。然し乍ら吾々の觀察も従つて又綜合も、生産技術に關する吾々の知識に基くところの主觀的な要素を多分に含む限り、常に正確であることを期し難い。然るに氣候帶の研究

の如きにあつては、斯かる主觀的要素に基く不正確さの虞れは全くないと云ひ得るであらう。従つてその結果を用ひて、吾々の研究により、大なる確實性を與ふことを期すべきである。即ち同一氣候帶に屬する諸地域間の經濟現象を比較し、或は同種類の經濟現象を有する諸地域の所屬氣候帶を求めるといふ手續に依つて、上述して來た手續きに依る吾々の研究を補正し得ると信するのである。然し乍ら右の如き性質の研究は、現在決して吾々の満足し得る状態にあるわけではない。従つて經濟地理學固有の領域ではないけれども、吾々としても發言する權利を持つと云ふべきである。勿論今こゝで詳論する余裕はないが、根本的な二三の點に對する筆者の見解を述べて置きたいと思ふ。

氣候帶の研究が從來相當に行はれて來たのは、氣候が人間に對して最も重大な影響を與ふるものであるといふ見解が廣く行はれて居るからである。この見解の當否は今こゝで問題とする必要はないが、文化現象一般の環境としての自然を分析し觀察し綜合しようとする場合には、假説を設けて、自然現象の中から特に吾々の生活に大なる影響を持つ部面を選び出し、その上で分析・觀察・綜合を行はねばならぬ。換言すれば、無限に多數の自然的事實のうちで、最も人間生活に重大な影響を與へ得る形態にあるものを選び出すのである。從來氣候のみが斯かる性質のものとして注目されたが、土壤或は地下の埋藏物の如き陸界の要素も、決して氣候に劣らぬ重要性を持つ。氣候とは非常に多くの自然的事實の結果として氣界に現れる現象に對しての綜括的名稱である。若しこれを自然界が人間に對して最も大なる影響を與ふる部面として看做すならば、恐らく同じ程度に多くの自然的事實の合成果として陸界

に現れる現象(その綜括的名稱として假に地勢といふ言葉を用ひるとする)も、やはり同様な意義を有すると云つてよい。經濟學に於いて、自然の物質及び物質力の代名詞として「土地」といふ言葉が使はれて來たことから見て、このことが明かであらう。従つて氣候帶を設定することが正しいとすれば、同様に地勢帶を設定することも正しい筈である。然し乍ら水界(即ち海洋)は通常人間の居住本據ではなく、その人間に對する影響は、むしろ氣界及び陸界に於ける現象を通じて作用する場合が最も重要なやうに考へられるが故に、前二者と同程度の意義を持たせ得ぬかも知れぬが、とに角人間の海上生活の關する限り、やはり重要な影響を持つ。従つて自然界の諸事實の合成果として水界に現るゝ現象を綜括的に取扱ひ、氣界及び陸界の場合と同様に水界を幾つかの型に分けることも可能であらう。動植物界に至つては、自然界の無數の事實が直ちに動植物の型そのものに合成されて居るのであるから、その型に従つて動植物帶を區劃し得ることは明白である。且つ又動植物が人間にとつて重要な意義を持つことも云ふまでもあるまい。

斯くして、文化現象一般の環境としての自然界は、結局に於いて氣候・地勢・海洋・動植物なる四つの部面に纏められることとなる。即ち自然界は、最後に斯かる綜合が行はれることを豫定して分析され觀察されることになる。現在までの自然科學發達の状態から見れば、これ等四つの部面へ綜合さるべき諸種の自然的事實を求めることは、容易のことのやうに見える。従つて經濟地理學に於ける自然環境の觀察に於けるが如き不正確の虞れは全くないと思ふのである。要するに斯かる手續きに依つて、氣候の諸種の型・地勢の型・海洋の型・動植物の型に應じて全地表

が幾つかの地帯に區劃されるならば、吾々はその結果を用ひて、同一型の地帯に屬する諸地域間の經濟現象の異同を求むることに依り、吾々の研究を補正することが出來ると思ふ。勿論その爲めには、解決されねばならぬ問題が幾多存在することは、右の簡単な敘述のうちにも自らから明かである。然し乍らそれ等の考究は他の機會にゆづるとして、本稿を擲筆する。

(昭和十一年八月廿七日)

價 値 論 と 計 畫 經 濟

氣 賀 健 三

一、序 論

二、社會主義的計畫經濟

三、計畫經濟と價值計算

四、計畫經濟論者の批判

一、序 論

此論文の根本的目的は經濟政策的判斷に對して經濟理論が示す所の意義を明にすることである。一つの經濟政策の採否を決定するには、論理的に言へば遠せらる可き目的が豫め承認されて居り、其目的に對して斯か／＼の政策即ち手段が適當なものであるか何うかを論斷するのてなければならぬ。目的が確立されて居らなくてはならぬことは、政策といふものが一個の合目的な價值判斷であるといふ點から見ても明の理と言つて差支へない。既に目的が確認されて居るならば、其目的實現の一手段たる政策案の採否は何等主觀的な意思に據る事なく、目的と手段との間の關係を因果的に觀察することに依つて之を決定することが出来る。即ち其手段の實施が、所期の目的に添はぬ結果を齎らすと論理的に推斷されたり、又其政策が理論的に確められたる現實の因果關係を無視するものである